

コロナ禍での対面ヒューマンライブラリーの実践と 青陵学生司書プロジェクト

関 久美子

The Practice of Face-to-Face Human Library and
Seiryō Gakusei-Shisho (Student Librarian) Project in the COVID-19 Pandemic

Kumiko Seki

1. はじめに

2000年、北欧最大の野外音楽祭であるロスキルド・フェスティバルの一面のブースでヒューマンライブラリーが初めて開催されてから20年以上が経過した。当初はデンマークの若者たちが中心となり暴力撲滅を掲げて行われたヒューマンライブラリーであるが、現在では社会の偏見を低減することや、多様性に寛容な心を育てるための実践的なイベントとして、この20年の間に世界90か国以上に広がり、日本各地でも大学、各種団体、個人で開催されている（坪井2017）。新潟青陵大学 新潟青陵大学短期大学部 社会連携センター（以下：青陵社会連携センター）でも2018年から公開講座「ふわりとつつむインクルージョン講座」の一つとして同大学・短大を会場に学内外に向けてヒューマンライブラリーを毎年開催してきた。

「障がい¹をもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は1対1で、あるいは1対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』（イベント）」（横田2012, p.155）であるヒューマンライブラリーは対面での人と人との対話がベースであり、ゆえに2020年から日本でも広がり始めた新型コロナウイルス感染症は社会における人々の物理的距離の確保を余儀なくし、ヒューマンライブラリー実践者に苦悩をもたらした。しかし新型コロナという未知のウイルスによって不確実性が高まる社会であるからこそ対話を止めてはいけないと、コロナ禍ではオンラインでのヒューマンライブラリーが各地で開催されるようになった。

青陵社会連携センターでも2020年、2021年とZoom会議室システムを利用してオンラインでヒューマンライブラリーを開催した。オンラインでの開催のメリットとしては、参加のしやすさ、物理的な距離を超えて全国の人々と繋がれる喜び、またZoomのブレイクアウトルーム機能を使った少人数制での対

¹ 「障がい」「障害」の表記に関しては様々な見解によって議論がなされるが、本稿では原則その言葉を使用した者が記した表記に従い、それ以外は「障害の社会モデル」の概念をもとに「障害」の表記を使用する。

話ゆえの親密性などがあるが、デメリットとしては発話のタイミングの難しさや、特に発達障害のある参加者にとっては相手の表情や感情が分かりづらいといったことがあげられ（関2021、2022）、対面でのヒューマンライブラリーを望む声も多くあげられた。そして、2022年度の第5回目を迎える青陵でのヒューマンライブラリーは新型コロナウイルス感染症対策を徹底した上で対面にて開催した。本稿では、ヒューマンライブラリー運営を担う新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 学生司書プロジェクトの活動報告、コロナ禍における対面でのヒューマンライブラリーの実践報告、そしてアンケート結果等からヒューマンライブラリーの効果を考察することを主たる目的とする。なお、これ以降、ヒューマンライブラリーでの語り手を「本」、参加者・聴き手を「読者」、スタッフを「司書」または「学生司書」とする。

2. 新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部 学生司書プロジェクト

2-1. 勉強会

ヒューマンライブラリーにおける「司書」とはイベントの主催者である運営スタッフのことである。青陵社会連携センターが主催するヒューマンライブラリーであるが、準備・運営は教育の一環（先進的な教育方法の開発・取組）として学生が行うこととし、「新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金」を継続的に獲得している。今年度は筆者の担当するゼミの活動として新潟青陵大学短期大学部人間総合学科2年生15名を中心に、新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科4年生1名、3年生3名、1年生1名、社会福祉学科4年生1名、3年生1名の有志が加わり、計22名が「学生司書」として活動した。

6月から7月にかけて、多様性を学ぶことを目的に様々な属性を持つ方をゲストスピーカーとして、またその分野の専門家を講師として迎え勉強会を行った【表1】。

【表1】

月日	授業形態	テーマ	参加人数
6月1日	対面+ オンライン	・難病、アラサー大学生 ・不特定Xジェンダー、パンセクシャル	16人
6月9日	オンライン	・ひきこもり、自殺未遂、アルコール依存症 ・アセクシュアル	15人
6月15日	対面+ オンライン	・ゲートキーパー研修 (他ゼミとの合同企画)	32人
6月23日	オンライン	・視覚障害 ・女性と障がい	14人
6月29日	対面+ オンライン	・中途四肢麻痺 ・発達障害、パンセクシュアル	14人
7月7日	オンライン	・慢性疲労症候群、獣医師 ・双極性障害、発達障害	15人
7月13日	対面+ オンライン	・ろう者の現状、手話通訳士	14人
7月21日	オンライン	・中途聴覚障害 ・鬱病・適応障害	15人
7月27日	対面+ オンライン	・心の病、摂食障害、女装家 ・視覚障害	14人
12月21日	対面+ オンライン	・「聞こえ方」のいろいろと手話講座	11人

ゲストスピーカーの多くは11月のヒューマンライブラリーで実際に「本」となる方も多く、ヒューマンライブラリーのリハーサルとしても機能している。またオンラインでも勉強会を行ったので、東京や北海道からの参加もあった。一方、3年ぶりに対面での勉強会も開催することができた【写真1】【写真2】。「学生司書」はゲストスピーカーの多様な背景を学ぶと同時に、ゲストスピーカーとの対話を通して、ヒューマンライブラリーの「本」との接し方を学んでいく。

【写真1】



【写真2】



2-2. 課外での活動

今回はヒューマンライブラリーに付随する2つの課外活動を「学生司書」とともに行った。1つ目は東新潟中学校の特別支援学級での「ミニヒューマンライブラリー」の開催である。ヒューマンライブラリーは本来、社会の偏見を低減することを目的に、多様な背景を持つ「本」と1対少数で対話を重ねる。今回は「ミニヒューマンライブラリー」と題して行ったがその形を大きく変え、中途四肢麻痺を属性のひとつに持つ「本」と4名の「学生司書」とともに特別支援学級を3回訪問し、「本」を囲んで毎回15名程度の生徒と対話の会を開催した【写真3】。生徒自身も知的障害や精神障害といった多様な障害を抱えており、発言が得意な生徒、不得意な生徒がいる中ではあったが、「本」の個人的な趣味や好みに関する質問など、「本」の属性を超えた「本」自身への質問が飛び交うことも非常に興味深かった。また「本」の使用している電動車椅子をもっと近くで見たいといった要望や、「本」の介助者にも質問するなど、まさにヒューマンライブラリーの固定概念から良い意味で逸脱する対話が行われた。3回目の訪問

【写真3】



【写真4】



では、「3年後、5年後、10年後の私」をテーマに「学生司書」も対話に参加し生徒との交流を図った。

2つ目は新潟青陵高等学校へのヒューマンライブラリー事前授業である【写真4】。この授業には筆者と「学生司書」8名(内「本」役1名)、そして高校からは1年生から3年生までの46名の生徒が参加した。まずは筆者からヒューマンライブラリーの概要、多文化社会における「違いを知る」ことの重要性、無意識の偏見等について簡単に講義をしたのち、今回「本」役としてもヒューマンライブラリーに参加する「学生司書」から、自身の属性であるパンセクシュアル、不定性Xジェンダーについて、他「学生司書」数名から「なぜヒューマンライブラリーに『司書』(スタッフ)として参加したか」について発表してもらった。

その後、生徒を5～7人のグループに分け、各グループに「学生司書」が1名つき、「本」役の「学生司書」からはさらに詳しい自身の属性について、他「学生司書」から、後述する「本」の「あらすじ」(紹介文)の冊子を参照しながら、各自が担当する「本」の紹介やこの活動を通しての気づきなどを共有してもらい、質疑応答を行った。生徒からは「本」役の学生に対して「『本』として語る前と後ではどう変化があったか」、「学生司書」に対しては「どこまで『本』に質問していいのか」、「『本』役はどのように見つけるのか」など質問があがった。非常に短い時間ではあったが、生徒たちは関心をもって授業に参加している様子であった。

2-3. 「本」の「あらすじ」作成

「あらすじ」とは「本」の紹介文である。後述するが、今回のヒューマンライブラリーは完全予約制としたため、参加希望者はネット上で公開された「あらすじ」を読み、事前に希望する「本」との対話の予約を取る。「あらすじ」はタイトル、「本」の属性を表すハッシュタグ、「本」の紹介、そして担当の「学生司書」のコメントで構成されている。「学生司書」は夏休みを利用し、「本」へのインタビューを通してこれらを考え、「本」と何度もやり取りをしながら「あらすじ」を完成させる。タイトルはその一文で「本」が抱える人生のテーマが分かるように、ハッシュタグは障害や病気といったものだけでなく、その「本」の趣味や従事する活動、好きなものといった人柄が分かるようなワードも含まれる。主となる紹介文は「本」が語るライフストーリーを「学生司書」が自分たちの言葉で再構築する。過去2年はこのインタビューもすべてオンラインで行っていたが、今回は「本」の都合に合わせてオンラインないしは対面で行うことにした。対面の場合は「学生司書」は「本」の職場や自宅まで出向いてインタビューを行うこともあった【写真5】【写真6】。

【写真5】



【写真6】



青陵学生司書プロジェクトではこの「あらすじ」作成をプロジェクト課題の根幹としている。「あらすじ」作成を通して、共にヒューマンライブラリーを開催するという「協力者」である「本」に対し興味をもち、その心情に共感する。インタビューでの「本」の自己開示は「学生司書」にとっては「信頼」という社会報酬となり、「本」の持つ属性を超えた人間関係が構築される。その過程で、「学生司書」が自己の固定概念や偏見に気づき、自分の考え方の枠組みを再構築する。なお2022年度作成の「本」の「あらすじ」は青陵社会連携センターのホームページ上²で閲覧できる。

3. ヒューマンライブラリー 2022実践報告

2022年11月6日（日）に「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO～あなたを知ってわたしを知りたい～」と題して、第5回目となるヒューマンライブラリーを3年ぶりに対面で、新潟青陵大学新潟青陵大学短期大学部にて（以下：青陵大学・短期大学部）開催した。今回は19組20名が「本」として参加、12時30分から16時までの間に15分の休憩を入れ30分の対話のセッションを5セッション設置した。16時15分から17時までは「本」「読者」の希望者と「学生司書」で簡単な振り返り会を開催した。

今回のヒューマンライブラリーでは事前に66名の申し込みがあり、開催数日前には予定していたすべてのセッションが予約で埋まった。しかし、11月は新型コロナウイルス感染拡大の第8波に向かっていく時期でもあったことから、当日のキャンセルも多く来場者は48名にとどまった。しかし「本」のキャンセルも出たことから、「読者」に急遽別のセッションに参加してもらい、また「学生司書」も「読者」として参加することで、準備していた約70セッションすべてを有意義に開催することができた。

【表2】は「本」のタイトルとキーワード、そしてセッション1から5の○印は実際に行われた対話セッションを示す。今回対面開催にもかかわらず、南魚沼や北海道からも「本」としての参加があった。また内2名が学生司書プロジェクトのメンバーであり、4名がそのOGである。

従来の対面型のヒューマンライブラリーの実施方法と大きく異なることは、「読者」の参加を完全予約制としたことである。今回はコロナ禍ということで、対話における「読者」の人数を5～6名程度から1～3名程度とし、また万が一参加者から新型コロナウイルスの感染者が出た場合に早急に連絡ができるよう、Googleフォームを使用し予約をしてもらった。これにより事前に、「本」、「学生司書」、教職員等も含めた会場にいる人の数が把握でき、動線の確保や対話における人数のコントロールが可能になった。また予約時にGoogleフォーム上で「同意書」³の内容を厳守するという約束のもと申し込みをもらうため、会場での「同意書」へのサインは必要なくなり、さらに事前予約によって当日に「本」の「あらすじ」を読み、その場で対話の予約をする必要もなく、受付での「学生司書」とのコンタクトも極力減らすことができ、会場内でも混雑することなく人の流れが非常にスムーズであった。

対話開催の合同会場では通常よりも対話ごとのテーブルのスペースをあげ、さらに飛沫防止パネルは対話を妨げるため使用しない分、「本」と「読者」の距離もある程度確保できるようなテーブルとイスの配置を行った。また聴覚に障害のある「本」の対話には「学生司書」のサポートが入るため個室を用意したが、それ以外の対話に対しても積極的に個室を活用した。本来は大教室に多くの対話のテーブル

² ヒューマンライブラリー 2022あらすじ (https://www.n-seiryu.ac.jp/cms/wp-content/themes/seiryu/images/page/extension/ec/course_info_20221106_synopsis.pdf)

³ 青陵社会連携センターでのヒューマンライブラリーではイベントの趣旨を理解し、本を意図的に傷つけないことや、個人情報を漏えいしないことなどのルールへの同意を参加条件としている。

【表2】

セッション

本	タイトル	キーワード	1	2	3	4	5
A	外の世界で”見えない”からこそ”見えたもの”	中途視覚障害	○		○	○	
B	手首の傷があるから今の私がいる～傷に包帯を巻いて、ばんそうこうを渡したい～	自傷行為	○	○	○	○	
C	生まれ変わっても私になりたい	心の病、摂食障害、女装家	○	○	○	○	○
D	“障がいがあっても生きやすい世界に”～自立生活センターの創設～	中途四肢麻痺		○	○		○
E	皮かぶり新しい自分に～素の自分をすべて出すのが正解ではない～	適応障害		○	○		○
F	僕には僕の色、あなたにはあなたの色	発達障害、パンセクシュアル	○	○		○	○
G	恋愛で感じる温もり、アセクシュアルとは…～まずはLGBTを知ってほしい～	アセクシュアル	○		○	○	
H	ここにいるよ	不特定 X ジェンダー パンセクシュアル	○	○			○
I	人生、楽しんだもんがち！	腎臓移植		○		○	○
J	病気と生きていくこと	難病（皮膚筋炎）、アラサー大学生	○		○		○
K	知ってほしい！～実習生から見る医療の現場～	コロナ禍看護学生	○			○	○
L	「俺なんかでいいのかな」	ひきこもり、アルコール依存症、自殺未遂、	○	○	○	○	○
M	自分の思いを形に～続けることで得られる楽しさ～	双極性障害、発達障害	○		○	○	
N	文字が声になる	中途聴覚障害		○	○		○
O	聞こえているけど、聞き取れない	難聴	○	○		○	
P	なんとかなる。～お腹が空いたらご飯を食べよう～	大人の発達障害・脊椎小脳変性症、半身マヒ	○	○	○	○	
Q	人生を楽しむ～完治しない病気との付き合い方～	慢性疲労症候群、獣医師			○	○	○
R	○○するな！！～女性×障害による複合差別～	女性と障がい	○	○	○	○	○
S	自分をさらけ出せるクラスが好き	特別支援学級担任		○	○		○
T	見えにくく、聞こえにくい～目の見え方はまるで水中メガネを着けているみたい～	難聴と弱視	○		○	○	

* 「本」A は当日キャンセル

* 「本」P はご夫婦での参加

を設置することで、人が集まり和気藹々と対話をする高揚感を演出していたが、今回は人と人との距離の確保を最優先とした。また会場の換気、対話セッションごとに「学生司書」によるテーブル・椅子等の消毒を徹底した。

コロナ禍におけるマスク着用は非常に重要であるが、聴覚に障害のある人にとっては相手の口の動きが読み取れずコミュニケーションに困難をきたしていることは明らかである。今回のヒューマンライブラリーでも聴覚に障害のある「本」3名の参加があり、その「本」とのコミュニケーションのためにUDトーク⁴を積極的に活用した。UDトークとはコミュニケーションの「UD=ユニバーサルデザイン」を支援するためのアプリで、音声を認識しそれを字幕に変換することができる。聴覚に障害のある「本」を担当する「学生司書」、また「本」の休憩室を担当する「学生司書」は各自のスマートフォンにこのアプリを入れ、パソコン画面と連動させて「本」とのコミュニケーションを試みた。

【写真7】は対話セッションの導入時で「学生司書」がUDトークを使用しセッションでのコミュニケーション方法を参加者に説明している。「学生司書」が話す内容は「本」の前に設置されたパソコン画面に映し出され、すべての情報が共有される。【写真8】は「本」と「読者」の対話時の様子で、コミュニケーションは敢えて、口話とホワイトボードなどを使用しての筆談で行った。

このUDトークの活用で、休憩時間などでの「学生司書」と「本」が楽しそうにコミュニケーションを取る様子も見られ、スムーズな意思疎通が図られた。一方、今回は特定の「学生司書」のみこのUDトークを使用させていたが、ヒューマンライブラリー終了後、他の「学生司書」からも受付や会場案内等で使用してみたいとの声が聞かれた。今回のヒューマンライブラリー終了後に放送された「Silent」、「星降る夜に」といった聴覚障害が登場するテレビドラマでこのUDトークが日常的に使用されており、学生の間でも認知度が高まっていることから、次回はすべての「学生司書」へのUDトークの活用を促したい。

【写真7】



【写真8】



4. アンケート・レポート結果

4-1. 「読者」アンケート結果

「読者」に対して、選択式・記述式で構成されるアンケートを実施した。回答数は48名中42名、回収

⁴ <https://udtalk.jp/about/>

率は84.5%であった。「読者」の年齢層は前述の通り「10代」が圧倒的に多く全体の50%を占めた。次に「20代」が20%、そして「40代」「50代」がともに10%、「30代」「60代」がともに5%であった。会場が大学であること、また今回は高校にも事前にヒューマンライブラリーの授業を実施し参加を呼び掛けたことが、若い世代の参加の増加に繋がった。

今回のヒューマンライブラリーに参加しようと思った理由（複数回答可）として最も多かったものが「自分にとって関心のあるテーマの『本』があったから」が76%、「企画の趣旨、目的に共感したから」、「教員の勧めがあったから」がともに45%、「大人数での講演会やセミナーではなく、1対少数人という形態に魅力を感じたから」が31%であった。また「ヒューマンライブラリーの『本』になってみたいから」という回答も少数ではあるが見受けられた。

「ヒューマンライブラリーに参加したことで、対話前の『本』（またはその属性）の捉え方と、対話後の「本」の捉え方に変化があれば、その内容を教えてください」という問いに対して、記述式の回答にはいくつかの傾向が見られた。まずは、「自分の想像や考えとは違っていた」、「知らなかったことを知ることができた」ということ、それにより「その属性についてさらに興味がわいた」あるいは「もっといろいろな人と関わりたい」といったように新しい世界に触れ、さらに自身の知識や世界を広げたいという考えである。次に「その人自身を見ることの重要性」についての回答も複数見られた。「障害はあくまで個性や属性にすぎない」というもので、障害を負う要素として捉えるのではなく、またその人のすべてを決定付けるものではなく、重要なのは「その人自身」に目を向けることであるといった回答や、障害といっても多様であり、人それぞれの背景があるゆえ、一括りで捉えるのではなく「しっかりとその人を見る（知る）」ことで、その人にあった対応やサポートができるという意見が複数あった。以下に回答を一部抜粋して紹介する。

設問：ヒューマンライブラリーに参加したことで、対話前の「本」（またはその属性）の捉え方と、対話後の「本」の捉え方に変化があれば、その内容を教えてください。

- ・ 障害はあくまでもその人の要素の1つにしかすぎないこと、直接接するときは「その人」を見るという意識を持たなくてはならないと改めて感じました。属性や障がいを目を向けるだけでなく、その人自身と対話することが大切なのだと思った。
- ・ 難聴の方が、手話より文字で見えた方がいいと仰っていて、こちらの「こうすればいい」が間違っていたと感じた。「本」の方の思い、考えなどを知ることができ、良かった。（中略）障がいに対してマイナスなとらえ方ではなく、1つの個性としてとらえられていて、「個性」というとらえ方は良いなと感じた。
- ・ 難聴の方や発達障害の方の話を聞き、自分が想像していた以上に大変なことがわかった。そういったひとたちのためにも、普通に生活できている私たち一人ひとりの支えや意識が大切なのだと思い、
- ・ 障害があると不便に感じるものがたくさんあったり、否定的に捉えることが多いと思っていたけれど、何も気にせず、楽しく生きている方、できることをみつけて自分のやりたいように生きている方ばかりです ごく楽しく感じました。

次に「ヒューマンライブラリーに参加したことで、あなた自身の中で何か変化があれば、その内容を教えてください」という問いに対しての記述式の回答で最も多かったものは、前述の問いの回答と重複するが、「知ることの重要性」に関するものであった。先入観にとらわれず、まずは知ろうとする姿勢、

そして理解しよう、認め合おうとする姿勢が大事だと認識し、今まで障害のある人との接点がなかったことを実感し衝撃を感じた、もっといろいろな人と関わりたい、もっと広い視野を持ちたいと思うようになったという回答も見られた。次に多かった回答は「読者」自身の「生き方に関する捉え方の変化」についてである。自分の悩みがなんとなく大丈夫だと思えるようになった、心が軽くなった、もっと自分らしくいてもいいと思った、もっと楽しく生きようと思った、など「本」との対話を通して自身の生き方をポジティブに捉えなおすといった傾向が見られた。また少数ではあるが、目と目を合わせて対話することの大切さを認識した、対話において臆病になる必要はないと知ったなど、「対話の有効性」に関するもの、そして今回高校生の「読者」の参加もあったことから、若い「読者」の考え方を聴けてよかったといった回答もあった。以下に回答を一部抜粋して紹介する。

設問：ヒューマンライブラリーに参加したことで、あなた自身の中で何か変化があれば、その内容を教えてください。

- ・「知らないこと」と「知ろうとしないこと」には大きな違いがあるように感じました。前者は恥ずかしいことではなく、そこから知ろうとすることが大切なのだと思ったので、明日からは自分の知識はその人を理解するのに必要な情報のほんの一部でしかないということ、知らないと認め知ろうとする姿勢で敬意を示せるようになりたいと考えました。
- ・本の皆さんはどなたも工夫しながらご自身のあたり前の日常生活を送られていて、前向きだけど過度に前向きという訳でもなく、自分の人生を生きているところがすごいと思いました。属性にとらわれず、目の前にいる方をその人として知ろうとすることを大切にしたいと感じた。
- ・まずは知ること、理解しようとするのが大切だと思った。また、誰かの他人の問題ではなく、自分に関係あることと捉えられるようになったと思う。
- ・こちらが気をつけて「これは話していいの」と思ったことも、いざ伝えたらポジティブに受け止めてくれて、臆病にならなくていいんだと思った。
- ・自分の中での悩みがあったけれど、みなさんのお話を通して、何とかなる、大丈夫と思えた。
- ・コロナ禍でも楽しめることを探そうと思った。人を頼ることの大切さを知った。
- ・心が軽くなった。生きることの大切さを感じた。若い読者の方の意見が聞けたので良かった。
- ・高校生が参加していて、何かを知ろうとする純粋な気持ちに感銘した。

4-2. 「本」のアンケート結果

「本」20名中のうち15名はすでにヒューマンライブラリーに複数回参加していることから、「本」に対するアンケートは、今回のヒューマンライブラリーに参加するきっかけと参加してみたの気づきはなにかという簡単な記述式の設問にとどめた。回答数は17名で回収率は85%であった。

ヒューマンライブラリーに参加するきっかけとしてもっとも多くあげられたのは、自身の属性について知ってもらいたい、興味を持ってもらいたい、あるいはそれを共有することで社会や悩んでいる人の役に立ちたいというものであった。またヒューマンライブラリーが「本」にとってのライフワークにもなっており、参加すること自体が楽しいと感じているという回答も複数見られた。少数回答ではあるが特記するものとして、自分について語ることで自分を見つめなおし理解したかったから、ヒューマンライブラリーを通して同じ属性を持つ人と知り合えたら良いと思ったから、といったものもあった。

今回のヒューマンライブラリーに参加しての気づきやコメントを回答してもらった設問では、多くの「本」が対面でのヒューマンライブラリー開催を心待ちにしており、そして実際に対面での開催が叶っ

たことに対する喜びの声が多く見られた。会場の雰囲気を感じながら「読者」が目の前にいることで感情も伝わりやすく深いコミュニケーションができたというものから、筆者を含め「学生司書」にも久しぶりに会えたことを嬉しく思うといったコメントなど、主催者側としても非常に嬉しい言葉を多くいただいた。また「あらすじ」作成のインタビューやヒューマンライブラリーでの対話を通して、自分自身を振り返るいい機会になった、毎年ヒューマンライブラリーに参加することで自分の語りが深まり自己探求できているといった、自身への気づきに関する回答も複数見られた、これら以外にも非常に多様かつ興味深い回答が多くあった。以下にその一部を抜粋して紹介する。

設問：今回ヒューマンライブラリーに参加されての、気づきや感想などご自由にお書きください。

- ・過去の経験を話す「本」の方が多い中で、難病と上手に付き合いながらポジティブにいろいろなことに挑戦している現在についてお話するのはどうでしょう」と担当してくれた司書さんに言ってもらったので、経験中心に話していた昨年とは違う角度からお話ができるように思います。
- ・みんなこのような場を求めていたのだな、ということを感じました。(中略)他のセッションの様子を聞くことができたり、本も読者も司書も一緒になって考えを紹介し合えたり、魂の揺さぶられる会になりました。(後略)
- ・筆談をお願いする引け目や負い目を全く感じさせなくて、当然のように文字で伝えてくれるのが嬉しかった。
- ・私は普段、聞こえる人とのコミュニケーションで、「必要に迫られて」筆談を使っていて、でも、今回、大きなホワイトボードを使うなどしてみた結果、「必要」を越えた、筆談ならではの楽しみ方を発見しました。この楽しさを聞こえる人たちとも共有できるといいなと思います。
- ・本としては、自身の辛かった体験を開示することの大変さと、どこまで分かってもらえるのかという不安があってとても疲れる体験でした。ただ、自分の本のテーマに何かしらの興味を持ってきてくださる読者の方々との対話は、それ以上に価値のある時間になりました。

4-3. 「学生司書」のレポートから

ヒューマンライブラリー終了後に「学生司書」にはいくつか問を用意し、自身の学びについて簡単なレポート形式で回答させた。「ヒューマンライブラリー一連の活動を通して、自分の中での変化や気づきについて書きなさい」という問いに対して、「学生司書」からは自身の本来の興味や置かれた環境、また担当した「本」の属性によって実に多様な回答があげられた。その中でも共通していることのひとつとして、「知ること」で自身のステレオタイプや思い込み、あるいはマイノリティに対するイメージが変わったといった「考え方の枠」が再構築されたというものであった。例えば障害を特別なことと捉えていたり、「大変」だとか「かわいそう」だとか、何かしらネガティブな評価や優劣の要素が含まれる考え方をもっていたが、「本」との個人レベルでの関わりを通して、そのイメージが覆されたという回答が多くみられた。また「知る」ことによってさらに深く知りたい、あるいはもっといろいろなことを知りたいといったように探求心を深める結果にも繋がり、さらに今後自身の生活においても、知らないことを知ろうとすること、マジョリティ・マイノリティに関係なく他者に興味を持つとすること、他者と関わろうとすることの大切さと必要性について言及する回答も多くあった。以下に回答を一部抜粋して紹介する。

問：ヒューマンライブラリー一連の活動を通して、自分の中での変化や気づきについて書きなさい

- ・最初は偏見がないわけではありませんでした。でも、この活動をしていくうちに偏見を持つことは悪いことではないけど、その人の事を知らない方が恥ずかしく、失礼なことだということに気が付きました。(中略) 自分の偏見だけで狭い視野を持っているのがすごくもったいないことだと思います。知らないことを知ろうとする、そういう心がけ一つで見えてくるものが変わってくるのではないかと思いました。
- ・障がいを個性としてとらえられるようになったのはこのイベントを通してだと思いました。特別な人だと捉えがちだが私たちと何ら変わらない事を知りました。そのような個性を持った方と道で会い困っていた様子でも今までは勇気が出ずに、助けようとしつつも見て見ぬふりをしてきた。でもお声がけしてくれることは嬉しいとおっしゃる個性を持った方が多くいることを知ったので、これからはお声がけをしようと思いました。
- ・(前略) 勉強会で、あらすじ作りで、本の方々の話を聞いて、本の方についてや属性について知ることができる+自分自身を振り返っていたなと思った。自分もそんなことがあったな、自分もそんな生き方がしたいなとか、話を聞きながら自分についての理解が深まったと思う。
- ・(前略) 私はもともと偏見もちな面もあるため、正直「大変」「可哀想」といったマイナスのイメージが強かったと思う。だが本の皆さんと関わり、お話していく上でそんなマイナスなイメージを払しょくするような考えや生き方をたくさん教えていただいたように感じる。今はマイノリティな属性の方を見かけると、とても気になってしまうようになった。(後略)

5. 考察

3年ぶりに対面でのヒューマンライブラリーであったが、依然コロナ禍の影響を受ける開催であった。ヒューマンライブラリーは本来、非常にアクセシビリティの高いイベントとされている。前述した通り、北欧の野外ロックフェスティバルの一角にブースを構えてスタートしたヒューマンライブラリーは偶発的にそこに居合わせた人が気軽に対話に参加できた。それと同じよう、日本で開催される多くのヒューマンライブラリーは申込不要で、当日その場に行き、興味のある「本」を選び、その「本」と会話するという、カジュアルでかつライブ感があった。しかし今回の会場である青陵大学・短期大学部の新型コロナウイルス感染症ガイドラインに従い、事前に参加者人数の把握やある程度のコントロールが必要であり、オンライン開催時と同様にネット上での事前予約制とした。それにより当日は混雑も見られず無事開催できたが、対面開催としてのアクセシビリティはやや低下したと思われる。また、事前予約制にしてから60代、70代といった高齢の参加者が減少したのも、ネット上で予約するということが参加への壁になっているのではないだろうか。実際に電話での問い合わせや、当日参加したいと会場を訪れた人もあったことから、今後の参加方法には検討が必要である。

アクセシビリティという観点では、オンライン開催は物理的・時間的な制約がなく、Wi-Fi環境が整っておりPCやスマートフォンがあれば全国、あるいは世界どこからでも参加できるという点でメリットがあった。しかし今回対面でヒューマンライブラリーを開催してみて、実際にリアルな対話が切望されていたのは特に「本」の声からも明らかであった。これはヒューマンライブラリーに限らず、コロナ禍において人と人との物理的接触が制限され、一見以前よりも便利になったように感じられるオンラインでのコミュニケーションの無機質さに無意識的に疲弊していた私たちが望んでいたものだったのかもしれない。今回は「本」の休憩室での「本」同士、また「本」と「学生司書」の交流も以前より活発に行

われている様子であった。また対面開催では初めての「振り返り会」を開催し、「読者」、「本」、「学生司書」が互いの立場でヒューマンライブラリーでの体験を共有する場も好評であった。

ヒューマンライブラリーは「読者」、「本」、「司書」と関わる全ての人に良い影響をもたらすとされる。「読者」は自身とは異なる他者の受容が促進され、多様性への寛容な心が育まれる。「本」は対話のナラティブ効果を通じて、肯定的な自己概念を獲得し自信にもつながる。そして「司書」には「読者」が得られる影響に加え、アクティブラーニングという形でコミュニケーション能力や社会人基礎力の育成という効果も見られる（横田、2018）。新型コロナウイルス感染症拡大のためにヒューマンライブラリーの本来の形を踏襲できていないが、青陵での5回のヒューマンライブラリーを終え、過去の「読者」、「本」アンケート結果も含めると、一定の効果をもたらしていると考えられる。また「学生司書」のレポートから、そして学生司書プロジェクトを指導する筆者の体感としてもこの活動が、授業内だけでは得られない情動的な深い学びに結びついていると言えるであろう。ただ、ここではそれぞれの立場にそれぞれの効果が見られるという大きな「傾向」としての考察である。ヒューマンライブラリーという空間において、あるいはこのイベントの準備から当日の運営までを通して「読者」、「本」、「学生司書」が得る学びや気づきは唯一無二であり非常に興味深く、それを大きな傾向としてまとめてしまうのは惜しいことである。今後は個々の学びや気づきがいかなるものか、そしてそれらがヒューマンライブラリーという空間の外で個々の姿勢や行動にどのような影響を与えるかを考察することで、ヒューマンライブラリーが共生社会実現にどのように貢献していけるかさらに探求したい。

6. おわりに

2回のオンライン開催を経て、ようやく本来の形を取り戻しつつあるヒューマンライブラリーであるが、対話をベースとするこの取組は、まだ新型コロナウイルスの影響から完全に脱することはできていない。2023年5月からその取扱いが「2類」から「5類」に移行することが正式に決定したが、それでもなお続くであろう「with コロナ」社会で、この活動を継続していくにはまだまだ多くの工夫が必要である。

青陵社会連携センターの今後の目標として、ヒューマンライブラリーの継続的な開催を目指すとともに、「読者」の年齢層の拡大を図ることを検討している。今回のヒューマンライブラリーも高校生、大学生の参加者が多くみられたが、より若い層に周知することで今後は中学生の参加も視野に入れるとともに、前述した通り60代70代といった層にもアプローチし、属性や世代を超えた対話を目指したい。また、今回の東新潟中学校の特別支援学級での「ミニヒューマンライブラリー」のように、学外にも出向き開催し、ヒューマンライブラリーを開催したいという団体、個人へのサポートも積極的に行っていきたいと考える。

- 関久美子「オンラインヒューマンライブラリーの実践と考察」新潟青陵大学短期大学部研究報告、51、2021. 3、11-19項。
- 関久美子「オンラインヒューマンライブラリーと青陵学生司書プロジェクト」新潟青陵大学短期大学部研究報告、52、2022. 3、49-58項。
- 坪井健『ヒューマンライブラリーへの招待:生きた「本」が語りの心のバリアを溶かす』明石書店、2021、79項。
- 横田雅弘「ヒューマンライブラリーとは何か—その背景と開催への誘い」加賀美常美代・横田雅弘他編著『多文化社会の偏見・差別：形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店、2012、150-171頁。
- 横田正弘「ヒューマンライブラリーの可能性「読者」(来場者)と「司書」(学生)の学びを中心に」言語文化教育研究、2018、33-44項